

学生生活のためのアンケートを活用した学生相談体制の充実へ向けて

For the Purpose of Improving Student Consultation System Using Questionnaires for Student Life

石川悦子¹⁾・松原絵美²⁾・南舞³⁾

ISHIKAWA, Etsuko · MATSUBARA, Emi · MINAMI, Mai

Key word : 学生相談, 適応感, 不安感, 大学生活のためのアンケート, 初年次教育

1. 問題と目的

近年、大学入学後に大学生活や学修への適応に困難を抱える学生が増加し、大学における初年次教育の重要性が注目されている。この背景には、大学のユニバーサル化により大学に進学する層が広がったことに加えて、高等学校までの発達課題を十分に達成されないままに大学に移行する例の増加や、家庭および地域社会の在り方の変容など多様な要因が考えられる。また、大学入試方法が多様化したこともその一因であると考えられる。そこで、大学への適応を促進するための一方策として重視されているのが、大学入学後1年目の「初年次教育」である。濱名(2006)は、初年次教育に盛り込むべき内容として次の7点を挙げている。①大学生活への適応(大学生活, 学習, 対人関係等), ②大学で必要な学習技術の獲得(読み, 書き, 批判的思考力, 調査, タイム・マネジメント), ③当該大学への適応, ④自己分析, ⑤ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入, ⑥学習目標・学習動機の獲得, ⑦専門領域への導入, である。これらのことは、対人関係等を含む生活スキル全般及び学修スキルや学修への動機付けなど広範囲に亘る初年次教育の必要性を示唆している。

日本において大学等への進学率は年々上昇し、平成30(2018)年度の国の学校基本調査によれば高等教育機関への進学率は81.5%(前年度より0.9ポイント増)で過去最高であり、この内大学・短大進学率は57.9%(前年度より0.6ポイント増), 4年制大学進学率53.3%(前年度より0.7ポイント増)で、いずれも過去最高である。

他方、大学生の大学生活不適応感の増加も指摘されており、1970年代から80年代にかけてのスチューデントアパシーといった大学生特有の問題に加えて、これまで中高生を中心にみられていたような不登校を中心とする不適応状態が大学生にまで拡大している。大学の中途退学率について、文部科学省が国・公・私立大学, 公・私立短期大学, 高等専門学校1,191校(回答率約97.6%)を対象に実施した調査結果(平成26年2月7日-3月7日)によると、中途退学者の総数は、全学生数(中途退学者, 休学者を含む)2,991,573人のうち2.65%(平成19年度比0.24ポイント増)に当たる79,311人であった。中途退学の理由の内訳は、経済的理由2.4%, 転学15.4%, 学業不振14.5%, 就職13.4%, 病気・ケガ・死亡5.8%であった。これを大学4年間として捉えると、2.65%を4倍した10.6%, すなわち1割強の大学生が中途退学すると捉えることができる。さらに休学者の総数は前掲の全学生数(中途退学者, 休学者を含む)のうち2.3%(同0.5ポイント増)に当たり67,654人であった(注1)。

大久保(2005)は、大学での適応感は高校時代の学校への適応感に大きく影響される、と指摘する。大学生は入試を乗り越えほっとするのも束の間、入学と同時に能動的で自主的な自己管理が求められ、高等学校とは異なる大学の仕組み、履修登録や講義・課題への対応、新しい人間関係、通学や一人生活への対応等多くの変化に適応しながら対処をする必要がある。また、不本意入学等のストレスを抱える場合もある。松尾(2011)は、幼児保育学科新生対象(213件)に実施した意識調査について、新生活開始に当たって意識した不安や悩みを勉学・生活・進路の3分野に分けて自由記述で調査した結果を報告している。それによると、多い順に「勉強上の不安・不満」69.5%, 「進路の不安・不満」51.6%, 「生活の不安・不満」31.0%であり、勉強上の具体的な不安

1) こども教育宝仙大学こども教育学部教授

2) こども教育宝仙大学学生相談室カウンセラー

3) こども教育宝仙大学学生相談室カウンセラー

材料は、「試験・レポート・論文」81件(38.0%)、「授業についていけるか」39件(18.3%)、「ピアノ・音楽」25件(11.7%)であった。生活上の不安では、「一人暮らし」14件(6.5%)、「通学」13件(6.1%)であり、進路の不安では、「就職できるか」55件(25.8%)であった。山田(2006)は、大学1年の早期(6月)に意欲減退診断検査および大学生生活不安尺度を用いたアンケートを実施し、その後、大学3年次までに退学・休学・留年等の動向を調査しつつ1年次のアンケート結果と比較すると次の特徴がみられたことを報告している。すなわち、退学・休学・留年をする学生の半数がアンケート調査の未実施者であった。また、入学後不適応を示す学生の半数は新入生の早期に連続した欠席があり、その後の不適応を示す特徴として入学早期における連続した授業欠席は重要な指標となり得る。さらにもう一つの特徴として、不適応感が主体的要因ではなく、不本意入学や入学後の不本意感が大学への違和感として認知されていることが、退学という選択に繋がる可能性がある、という点を指摘している。加えて、高下(2011)は、大学1年生(330名)対象に4月および7月の講義中に、ICF(国際生活機能分類)の4つの観点から作成した質問紙調査を実施し、4月から7月にかけての変化を検討している。その結果、「心身機能・身体構造」領域では心身の健康的状態は保たれているが倦怠感の増加傾向があること、「活動・参加」領域に関しては学習面・対人面の不安は緩和されるが、授業意欲が低下すること、「環境因子」領域では大学の仲間関係に馴染んでいくこと、「個人因子」領域では充実感や人生への期待感の高さは維持されるものの、就職への不安感が高まり、また将来への迷いも生じることが明らかになった、と報告している。これらのことから大学側は学生の健康状態を把握しながら予防的に働きかけること、モチベーションが上がる素地を整えること、仲間関係が作りやすいよう学生交流の機会を設けること、多くの学生に共通する悩みと個別の学生の悩みの双方へ応じられるようにすることなど、多様な配慮が必要であることを示唆している。

以上の結果から、大学生生活早期において満足度の低い学生は、その後不適応に陥る可能性が高いと考えることができる。大学1年次は必修科目が多く座学に終始しやすいため、対人関係に困難を抱える学生はより疎外感が増し所属感が低下する可能性がある。したがって、1年次の早期の段階で対人関係に困難を抱える学生に対しては、学生相談室や担当教員への個別相談を促す他、仲間づくりや安心できる居場所の提供など様々な支援の提供が求められる。

上記の先行研究等を踏まえ、筆者らは学生が抱く大学生生活不安に着目し、「大学生生活のためのアンケート」調

査を毎年継続的に実施している。調査対象は、1年次に限らず全学年共通で行い、必要な学内支援につながるよう教職員間の連携・協働を強化しているが、これまでのアンケート結果については年度毎の集計に止まってきた。そこで本研究では、2016年度から2019年度の4年間に実施した同アンケート結果をまとめて学年間の比較を行い、学年ごとの特徴を明らかにするとともに、それらを活用した学生支援のさらなる充実に向けて考察することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象者及び調査時期

調査対象者は2016年度から2019年度に私立A大学に在籍する1-4年生全員で、有効回答数1,171人であった。学年の内訳は、1年生345人、2年生296人、3年生287人、4年生243名である。

調査時期は、2-4年生は年度当初の4月に実施し、新入学生(1年生)は大学生活にやや慣れ始めたと思われる6月初旬の実施とした。

(2) 調査手続き

2-4年生は、年度当初のオリエンテーションの機会に学生相談室カウンセラーが配布して回答を求め、その場で回収した。1年生は必修科目の授業時間を利用して実施した。

倫理的配慮として、アンケート用紙配布冒頭で、「大学における大学生生活向上のために使用すること」、「結果は全体で集計し個人の情報を公表することはないが相談希望がある場合は連絡先を明記してほしいこと」、「回答したくない場合には無理に回答しなくても良いこと」を紙面及び口頭にて説明し実施した。

(3) 調査内容

藤井(1998)を参照し、山田論文(前掲)の大学生生活不安尺度の項目を一部改変した大学生生活不安尺度29項目に「大学内にもっと精神的な支えがほしい」等の4項目(A8, C31, 32, 33)を加えた33項目で構成した尺度に、「はい」「いいえ」による2件法で回答を得た。「はい」を1点、「いいえ」を0点として算出した。全33項目は、日常生活不安尺度(14項目)、評価不安尺度(11項目)、大学不適応尺度(8項目)から構成されている。

3. 結果と考察

(1) 不安総得点と3つの尺度の学年比較

不安総得点は、レンジ0-33点で平均11.43($SD=6.82$)であり、各学年の平均は1年生14.33点、2年生12.97点、3年生9.60点、4年生7.54点であった。学年を独立変

表1 不安総得点の学年比較

学年(人)	1年(296)	2年(345)	3年(287)	4年(243)	F値	多重比較 (Tukey 法)
平均	14.33	12.97	9.6	7.54	51.50	1>3>4, 2>3>4
標準偏差	(5.84)	(6.87)	(6.12)	(6.39)		
平均値の差	—	1.36365	4.7292*	6.7957*		
1						
2			3.3656*	5.4324*		
3				-2.6649*		

*: $p<.05$

数として一元配置分散分析及び多重比較を行った結果(表1), 1年生≒2年生>3年生>4年生 ($p<.05$)であり、学年に上がるにしたがって不安得点が減少している。1年生と4年生を比べると得点が半減している。本調査においては、大学生活全般、学業面、進路や在籍について学年が上がるにつれて不安が減少する傾向が明らかになった。このことから、1-2年生の学生の様子をよく観察し、必要に応じて個別対応を行うなど、学生が大学生活に慣れて自信をもって生活できるよう、早期発見、早期対応が必要であるといえる。

日常生活不安尺度(大学生活において一般的に感じる不安)と評価不安尺度(試験を含め、他人からの評価に対する不安)、大学不適応尺度(大学に対する違和感・不適応感)の3つの尺度の概要は、日常生活不安尺度はレンジ0-14点で平均4.90 ($SD=3.11$), 評価不安尺度レンジ0-11点で平均5.02 ($SD=3.39$), 大学不適応尺度は0-8点で平均1.62 ($SD=1.40$)であった。3つの尺度の相関(表2)からは、日常生活不安尺度と評価不安尺度の間はかなり強い相関(.717, いずれも $p<.01$)がみられ、日常生活不安尺度と大学不適応尺度の間にはやや強い相関がみられた(.406)。評価不安尺度と大学不適応

尺度の間はやや弱い相関がみられた(.357)。

この3つの尺度について学年を独立変数として一元配置分散分析及び多重比較を行ったところ、表3の結果を得た。日常生活不安尺度と評価不安尺度については、学年が上がるにしたがって数値が減少している(いずれも $p<.05$)。これに対して、大学不適応尺度については、平均値が最も高いのは2年生であった。1年と2年の間に統計的有意差は認められず、2≒1>3>4の結果を得た。大学在籍に関する不安や進路変更、退学等の迷いが2年次に最も高くなっている。次項では項目毎に学年比較を行いさらに詳しくみていく。

表2 3つの尺度の相関

	I	II	III
I 日常生活不安尺度	—	.717**	.406**
II 評価不安尺度		—	.357**
III 大学不適応尺度			—

** : $p<.01$ スピアマンの順位相関係数

表3 3つの尺度間の比較

	各学年の平均				F値	多重比較 (Tukey 法)
	1年	2年	3年	4年		
I 日常生活不安尺度	6.19	5.31	4.10	3.52	48.99	1>2>3>4
(標準偏差)	(3.02)	(3.10)	(2.74)	(2.82)		
平均値の差	—	.8814*	2.0866*	2.6730*		
II 評価不安尺度	6.64	5.72	4.69	3.30	53.89	1>2>3>4
(標準偏差)	(2.99)	(3.52)	(3.40)	(3.25)		
平均値の差	—	.9205*	1.9555*	3.3468*		
III 大学不適応尺度	1.66	1.98	1.49	1.26	10.07	1>4, 2>3>4
(標準偏差)	(1.16)	(1.70)	(1.33)	(1.25)		
平均値の差	.318	-.318	.177	.3993*		

* : $p<.05$

(2) 各項目による学年比較

1) 日常生活不安尺度

本尺度は、卒業、留年、仲間関係の構築や対人関係、生活時間の自己管理、教員との関係など大学生生活全般に関する全14項目で構成されている。各項目について学年を独立変数として一元配置分散分析及び多重比較を行い学年による特徴を明らかにすることを試みた。全体の傾向としては、学年が上がるにつれて数値の減少がみられ不安が軽減している様子がみられる。1-2年生は平均が.50に近いものも多く、卒業(A2)や留年(A3)、対人関係(A1, A6)等に半数以上が不安を抱えている。また、「A13 先生に“研究室まで来るように”と呼ばれたら何を言われるかとても気になる」は、全学年を通じて得点が高く(.50-.71)、4年生でも半数が「気になる」と感じていた。

学生が緊張感をもって研究室で指導を受けることは重要であり、この結果は肯定的に捉えたいところだが、研究室に呼ぶ時には要件や目的を学生に明確に伝えることが必要であろう。

さらに、「A10 1ヵ月の生活費が足りるかどうか心配である」、「A12 大学の先生と話をする時とても緊張する」、「A14 将来、良い就職ができるかどうか不安である」については学年間に統計上有意味な差はみられず、とくにA14は各学年で.72-.80と高得点であり、将来の就職に関しては全学年に共通する不安であることが示された。本学内では学年に応じたキャリアガイダンスを行いキャリアサポートセンターも毎日開室しているが、さらに個別の不安や課題についてはその内容に目を向け相談に応じる必要があると思われる。

2) 評価不安尺度

本尺度は、授業や成績、発表、試験など学業に関する不安尺度全11項目で構成されている。日常生活不安尺度(14)と比較しても平均点が高く(表3)、さらに、各項目ともに共通して1年生が有意に高得点であるという結果を得た。とくに、「B2 必修科目で成績が不可だったらどうしようと心配である」は、1年生が.83、2年生が.68、3年生が.57、4年生が.33で、とくに1-2年生の得点が高く必修科目に対する不安は3年になるまで続くが、3年生は標準偏差.75で幅が大きく、学年が上がるとこの件について個人差が広がる様子がみられる。また、「B5 成績のことが気になって仕方がない」は1年生.57、2年生.49、「B6 大学の成績のことを考えると憂鬱だ」は1年生が.62、2年生が.50、「B7 履修登録した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配である」は、1年生が.63、2年生.64、2年生.56、「B11 テストを受ける時、悪い点数を取ってしまうのではないかと心配になる」は1年生が.77、2年生が.59で、

いずれも1-2年生の半数以上が不安を感じている。これらの結果から、学年の進行とともに学修スキルを獲得し試験や課題等への対応にも慣れ、徐々に不安が解消されていく様子がみられる。また、初年次教育等によりタイム・マネジメントを含む学修スキルを伝え指導していくことにより不安を軽減させている可能性があると思われる。さらに、「B10 卒業論文、卒業研究が上手くできるかどうか、不安である」については各学年共通して高得点といえる(.58-.83)。学生たちは、不安を抱えながらも学業について受け身ではなく能動性と向上心を持って取り組むことが重要であるが、困った時には一人で抱え込まずに「相談する力」を身につけることが必要といえよう。

3) 大学不適応尺度

本尺度は、大学に在籍すること自体への迷いや不安、転部や進路変更、中途退学に関する8項目から構成されている。この尺度については、上記2つの尺度に比べ、2年生が他学年に比べ6項目(C26, C27, C28, C29, C30, C32)に亘って高得点であるという特徴がみられた。しかしながらこの尺度(レンジ0-8)の平均は1年生が1.66、2年生が1.98、3年生が1.49、4年生が1.26と全体に低得点である(表3)という特徴に注視しなければならない。また、大学生生活や授業、試験、実習等に慣れて大学生活の全貌がわかりかける2年生がその後の進路や在籍継続について真剣に悩み始めるという傾向が、僅かな数値のなかにも表れているといえる。さらに、「C7 本当に信頼できる教授にめぐり逢えない」については、各学年共通で一定数存在していた。

これらのことから、1-2年生の時期をどう乗り越えるか、大学生生活や学修スキルの要領を得て専門領域や本格的実習に移行していかれるよう、学生同士の仲間関係を醸成するとともに授業への出席状況等を管理しつつ、少人数授業やゼミなどで学生の様子をよく観察しながら学内の教職員の連携のもと必要な支援に早期につなげることが重要と思われる。

(3) 中途退学者について

2016-2019年の4年間に退学した14名の学生の不安得点(退学した学年当時)を検索したところ4-30点の幅があり平均は16.57点であった。これは、1年全体平均14.33を上回る数値であった。なかには、24点が1名、26点が2名、30点が1名おり、これは主に2年次であった。このことから、いずれの学年においても、1年平均14.33を上回るものは要観察として回答の中身を詳しくみるとともに、授業への遅刻・欠席状況、授業や課題への取り組み、仲間関係などを注意深くみる必要があると思われる。

表4 大学生生活不安尺度による学年比較

	各学年の平均 (標準偏差)				F 値	多重比較 (Tukey 法)
	1年	2年	3年	4年		
[A 日常生活不安尺度]						
A 1 大学で人が自分をどう思っているか気になる	.55 (.50)	.42 (.49)	.37 (.48)	.33 (.47)	11.53	1>2>3>4
A 2 4年間で卒業できるかどうか不安である	.67 (.47)	.47 (.50)	.26 (.44)	.15 (.36)	77.71	1>2>3>4
A 3 留年したらどうしようかと気になる	.67 (.47)	.45 (.50)	.26 (.44)	.13 (.34)	81.86	1>2>3>4
A 4 万一事故にあったり病気をしたらどうしようかと心配になる	.49 (.50)	.37 (.48)	.34 (.48)	.28 (.45)	10.78	1>2>3>4
A 5 友達と一緒に何かをしなければならない時、上手く協力できるか不安である	.38 (.49)	.34 (.48)	.26 (.44)	.23 (.42)	6.94	1>3>4, 2>4
A 6 サークルなどで先輩や後輩達と上手く付き合えるかどうか、不安である	.26 (.44)	.17 (.38)	.70 (.26)	.09 (.28)	18.41	1>2>3=4, 2>3=4
A 7 1眼目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか不安である	.42 (.49)	.50 (.50)	.39 (.49)	.38 (.49)	3.32	2>3=4
A 8 何らかの団体に突然勧誘されないか、不安である。	.11 (.31)	.06 (.24)	.02 (.13)	.03 (.17)	10.15	1>2>4>3
A 9 先生が近くにいたときになって仕方がない	.21 (.41)	.24 (.43)	.14 (.35)	.16 (.37)	3.82	2>3
A 10 1ヵ月の生活費が足りるかどうか心配である	.28 (.45)	.20 (.40)	.23 (.42)	.19 (.39)	2.86	n.s.
A 11 授業中先生が言っている内容が分からず不安になることがある	.56 (.50)	.45 (.50)	.29 (.45)	.24 (.43)	28.36	1>2>3=4
A 12 大学の先生と話をする時とても緊張する	.14 (.34)	.17 (.38)	.11 (.31)	.10 (.30)	2.80	n.s.
A 13 先生に“研究室まで来るように”と呼ばれたら何を言われるかとても気になる	.71 (.45)	.67 (.47)	.61 (.49)	.50 (.50)	10.16	1>3>4, 2>4
A 14 将来、良い就職ができるかどうか不安である	.80 (.40)	.75 (.43)	.76 (.43)	.72 (.45)	1.58	n.s.
[B 評価不安尺度]						
B 1 授業中何かしなければならにときミスをするのではないかと不安である	.44 (.50)	.40 (.49)	.28 (.45)	.22 (.42)	13.86	1=2>3>4
B 2 必修科目で成績が不可だったらどうしようと心配である	.83 (.38)	.68 (.47)	.57 (.75)	.33 (.47)	43.67	1>2>3>4, 2>4, 3>4
B 3 テスト中に時間が残り少なくなると自分の考えがまとまらなくなる	.52 (.50)	.42 (.49)	.42 (.49)	.32 (.47)	8.63	1>2=3>4
B 4 テストを受けていてわからない問題があると頭が真っ白になる	.41 (.49)	.37 (.48)	.25 (.44)	.23 (.42)	10.64	1>3>4, 2>3>4
B 5 成績のことが気になって仕方がない	.57 (.50)	.49 (.50)	.31 (.46)	.18 (.39)	40.59	1>3>4, 2>3>4
B 6 大学の成績のことを考えると憂鬱だ	.62 (.49)	.50 (.50)	.32 (.47)	.20 (.40)	44.40	1>3>4, 2>3>4
B 7 履修登録した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配である	.63 (.48)	.64 (.48)	.56 (.50)	.37 (.48)	17.22	2=1>4, 3>4
B 8 テスト中緊張して自分の力が発揮できない	.32 (.47)	.27 (.44)	.23 (.42)	.18 (.38)	6.05	1>3>4
B 9 授業やゼミで発表する時に声が震えることがある	.41 (.49)	.44 (.50)	.42 (.49)	.29 (.46)	4.63	1>4, 2>4, 3>4
B 10 卒業論文、卒業研究が上手くできるかどうか、不安である	.83 (.38)	.76 (.43)	.71 (.46)	.58 (.49)	15.78	1>3>4, 2>4, 3>4
B 11 テストを受ける時、悪い点数を取ってしまうのではないかと心配になる	.77 (.42)	.59 (.49)	.47 (.50)	.31 (.46)	49.65	1>2>3>4
[C 大学不適応尺度]						
C 1 こんな大学にいると自分がダメになるのではないかと不安になる	.05 (.21)	.16 (.36)	.08 (.28)	.08 (.27)	8.13	2>1>3=4
C 2 この大学にいると何か不安な気持ちになる	.10 (.30)	.20 (.40)	.15 (.35)	.10 (.30)	4.82	2>1=4,
C 3 出来ることなら、他の大学へ転学あるいは転部、転科したくて仕方が無い	.04 (.19)	.09 (.29)	.05 (.22)	.03 (.17)	4.47	2>1>4
C 4 入学した学部・学科が自分に合っていないような気がして不安である	.06 (.23)	.16 (.36)	.14 (.35)	.12 (.32)	5.89	2>1, 3>1
C 5 大学を退学したいと思うことがある	.07 (.26)	.17 (.37)	.11 (.31)	.05 (.22)	8.55	2>1>4
C 6 私は現在在学している大学にかなり満足している(※逆転項目)	.70 (.46)	.53 (.50)	.51 (.50)	.59 (.49)	7.48	1>2>3
C 7 本当に信頼できる教授にめぐり逢えない。	.35 (.48)	.40 (.49)	.32 (.47)	.26 (.44)	3.92	2>4
C 8 大学内にもっと精神的な支えがほしい	.31 (.46)	.29 (.45)	.16 (.37)	.15 (.36)	11.78	1>3>4, 2>3>4

p<.05

4. 今後に向けて

今回、学生生活のためのアンケートの4年分の結果を分析することにより、学年による特徴が明らかになった。1-2年次は他学年に比べて不安総得点が高く、とくに評価不安尺度に高得点を示す項目が多い。これらの結果は、まだ十分に大学生活に慣れないうちはむしろ当然の結果といえることができる。また、大学不適応尺度（大学に対する違和感・不適応感）については、全体に低得点ではあるが2年生が最も高く、1年次から感じ始めていた違和感や不適応感が増幅し確信に変わっていく場合や、具体的に学修を進める内に専門学科とのミスマッチを感じる場合もあるだろう。さらに、学生の中には、勉強の仕方や課題への対応方法がわからず一人で抱え込んで欠席が続くようになり、結果として不適応感が増すという場合もあるように思われる。個々の状況も踏まえながら、総得点が1年生平均の14.33点を上回る学生は要観察として、学生相談室利用への誘いを行う他、基礎ゼミ担当者や授業担当者と連携のもと早期対応を心掛けることが肝要であろう。

冒頭に記したように、相談希望の学生には本アンケートに連絡先を明記するよう指示しており、アンケート回答で気になる学生に学生相談室の案内を含めて連絡したところ、メール相談ならびに対面相談へと繋がった事案もある。学生が自主的に相談室を訪ねることは周囲が想像する以上にハードルが高い様子がみられる。本アンケート実施に当たっては相談員自身が学生の前に立って配布し、実施目的の説明を行い回収まで担当することにより、相談員が少しでも学生にとって身近な存在となる他、一人で悩んでいる学生の来談につながるようさまざまな工夫や教員からの後押しも必要であると思われる。「欠席が継続する」、「体調不良を訴え保健室利用が増えた」、「表情がさえない」、「孤立した印象がある」などの学生の変化を注意深く観察し、タイミングを逃さずに声掛けや支援につながるよう全学をあげてつねに学生支援の充実を心掛けたいものである。今後もこの視座に立って、アンケート等を利用して多層的な学生相談体制充実に向け、多角的な検討を続けていく必要性を強く感じている。

※注1：本調査の中途退学者の状況については、平成24年度の1年の間に中退した者について調査したものであり、休学者の状況及び授業料滞納者の状況については、平成24年度3月末現在で休学・授業料滞納をしている者について調査したものである。

【謝辞】

この調査にご協力いただいた学生諸氏に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- 藤井義久(1998). 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 68(6), 441-448.
- 濱名篤(2006). 中央教育審議会大学分科会大学教育部会資料. 初年次教育の現状と課題 ～“移行”問題を中心に～. 2006年11月8日(2019年11月10日閲覧)
file:///C:/Users/eishi_000/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/PAZQDWC0/003.pdf
- 松尾智則(2011). 幼児保育学科新入生意識調査報告. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 第43号, 105-114.
- 文部科学省学校基本調査(2014)
- 文部科学省(2012). 学生の中途退学や休学等の状況について(2019年11月1日閲覧)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1352425.htm
- 大久保智生(2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—. 教育心理学研究, 53(3), 307-319.
- 高下梓(2011). 大学新入生の適応感の変化—4月から7月にかけての初期適応過程—. 明星大学心理学年報, No. 29, 9-19.
- 山田ゆかり(2006). 大学新入生における適応感の検討. 名古屋文理大学紀要, 第6号, 29-36.